

アメリカ陥落2

大暴動

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

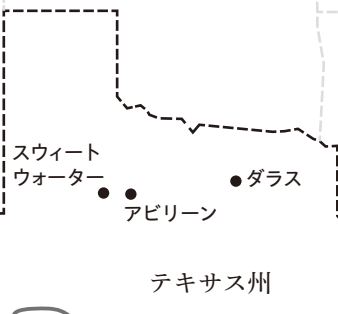
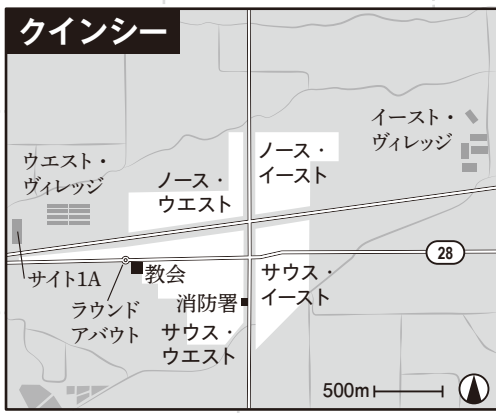
- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

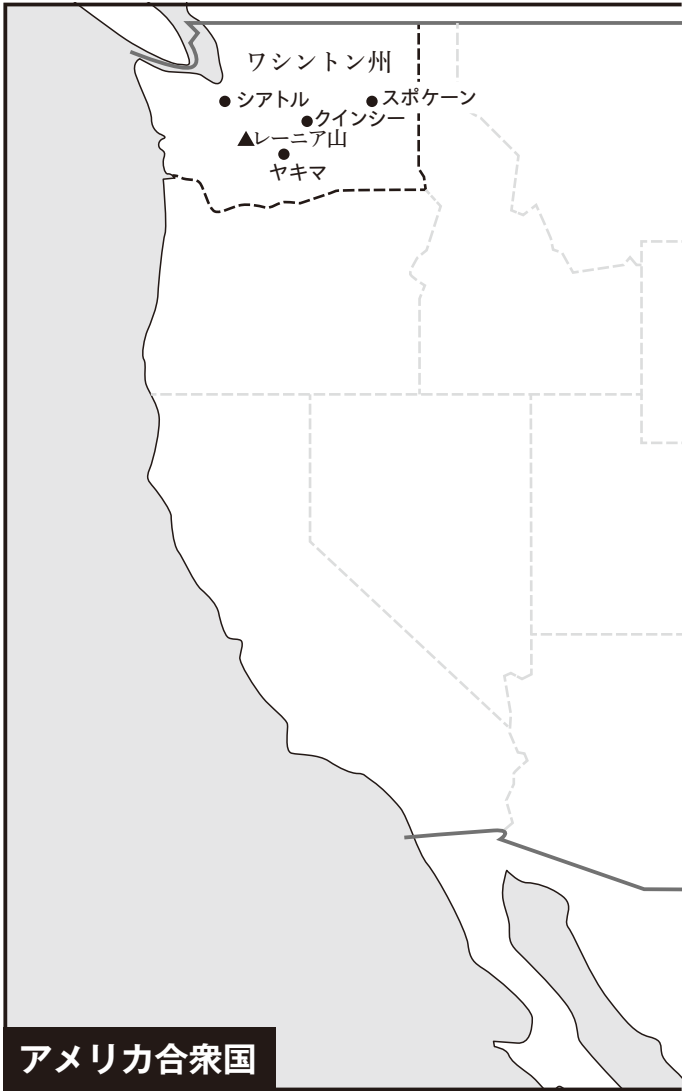
口絵・挿画
地図
平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 さまよえるヲランダ人	23
第二章 プレツパーズ	43
第三章 潜入者	69
第四章 洋上のブラフ	96
第五章 99パーセント	122
第六章 クインシーの戦い	150
第七章 バトラー	177
第八章 カローデン・ムーア	203
エピローグ	228

クインシー





ワシントン州

- シアトル
- スポケーン
- クインシー
- ▲ レーニア山
- ヤキマ

アメリカ合衆国

登場人物紹介

//// [日本] //////////////////////////////////////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平^{どもんこうへい} 陸将補。水陸機動団長。

《原田小隊》

原田拓海^{はらだたくみ} 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

畑友之^{はたけともゆき} 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

大城雅彦^{おおしろまさひこ} 一曹。土門の片腕。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎^{まちだはるお} 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口苾太^{たぐちしんた} 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実^{ひがひろみ} 三曹。田口のスポッター。コードネーム：ヤンバル。

《姜小隊》

姜彩夏^{かんあやか} 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

漆原武富^{うるしばらたけとみ} 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

福留弾^{ふくとめだん} 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

由良慎司^{ゆらしんじ} 三曹。ワイヤー（西部方面普通科連隊）出身の狙撃兵。コードネーム：ニードル。

《訓練小隊》

各務成文^{かがみしげふみ} 三曹。母校の大学でレスリングを指導。コードネーム：フール。

峰沙也加^{みねさやか} 三曹。山登りとトライアスロンが特技。コードネーム：ケーツー。

花輪美麗^{はなわ びれい} 三曹。北京語遣い。コードネーム：タオ。

駒鳥綾^{こまどりあや} 三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

瀬島果耶^{せじまかや} 士長。“本業”はコスプレイヤー。コードネーム：アーチ。

〈水陸機動団〉

司馬光 し ば ひかる 一佐。水機団格闘技教官。

〈第3水陸機動連隊〉

後藤正典 ごとうまさのり 一佐。連隊長。準備室長。

権田洋二 ごん だ よう じ 二佐。準備室幕僚。

鮫島拓郎 さめじまたくろう 二佐。第一中隊長。

神真之介 さかきしん の すけ 一尉。第二小隊長。

工藤真造 くどうしんぞう 曹長。小隊ナンバー2。

●海上自衛隊

〈第4航空群第3航空隊第31飛行隊〉

遠藤兼人 えんどうかねと 二佐。飛行隊長。

佐久間和政 さくまかずまさ 三佐。機長。

木暮楓 こぐれかえで 一尉。副操縦士。

●航空自衛隊

〈第308飛行隊〉

阿木辰雄 あぎ たつお 二佐。飛行隊長。TACネーム：バットマン。

宮瀬茜 みやせ あかね 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コブラ。

////【アメリカ】////

●エネルギー省

魔術師ヴァイオレット ソーサラー 通称M・A。Qクリアランスの持ち主。

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。

サイモン・ディアス 博士。技術主任。

●^{N S A}国家安全保障局

エドガー・アリムラ 陸軍大将。NSA長官。

●在シアトル日本総領事館

土門恵理子 どもん えりこ 二等書記官。

●空軍

テリー・バスケス 空軍中佐。終末の日の指揮機“イカロス”指揮官。
スペンサー・キム 空軍中佐。NSAきってのスーパー・ハッカー。

[ワシントン州]

●陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍予備役少佐。消防局の放火捜査官。
マイキー・ベローチェ 陸軍予備役少佐。

●ATF（アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局）

ナンシー・パラトク イヌイット族の捜査官。

●CAP（シビル・エア・パトロール）

ジェシカ・R・バラード 空軍予備役大尉。“ツイン・オッター”の
パイロット。

●ヴィレッジ

ヘンリー・リーバイ 工学博士。ヴィレッジ総括責任者兼サイト1A
の施設長。専門はシステム構築。

ジョージ・トリート サイト1Aの警備主任。

タッカー・トリート ジョージの息子。ドローンクラブ“チェイサー”
の部長。

ベッキー・スワンソン タッカーの幼なじみで“チェイサー”のメン
バー。

ケント・サビーノ 世界の終末に備える人。クインシー郊外在住。

●“ナインティ・ナイン”

フレッド・マイヤーズ UCLAの政治学准教授。通称“ミスター・
バトラー”。

ジュリエット・モーガン 動画配信ストリーマー。通称“スキニー・
スポッター”。

[テキサス州]

カール・F・リヒター テキサス州知事。

● F B I

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。
ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課。

● 郡警察 (ノーラン郡)

ヘンリー・アライ 巡査部長。アビリオン在住。
オリバー・ハッカネン 検死医。一度引退し、今はパートタイマー。
トシロー・アライ 元警部。ヘンリーの父親。RHK事件に気付いた
最初の警察官。

● その他

にしやまじょういち
西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レスト
ランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。在日韓国人だったが、現在はアメリカ国籍。
ちよまる
千代丸 穰一とソユンの息子。

//// [ロシア] ////

● 民間軍事会社 “ヴォストーク”

ヴァレリー・タラコフ 陸軍少将。
ゲンナジー・キリレンコ 陸軍大尉。
ワシリー・ドミトフ 軍曹。
アレクサンダー・オレグ 伍長。

//// [中国] ////

● 人民解放軍海軍

・ステルス艦上戦闘機 J - 35 (殲 35) 空母 フージン “福建” (80000 トン)
リンカンチアン
林剛強 海軍中佐。編隊長。TACネーム：老虎。
タオホン
陶紅 海軍大尉。部隊最若手の女性パイロット。TACネーム：シュエパオ 雪豹。

アメリカ陥落2 大暴動

プロローグ

アメリカ北西部ワシントン州クインシー——。

FedExのコンテナ型配送車は、二重になっているゲートの真ん中付近でしばらく待たされた。後ろのゲートがいったん閉まり、前のゲートが開くまで、配送車三台分くらいの空間に停止を命じられた。隣接する従業員用駐車場を抜けて施設内に入る来訪者の車は、必ずそこでいったん停止する決まりになっている。

辺りは、ただの四角い建物が建ち並ぶだけだ。窓もなく、壁に会社名のロゴが入っているわけでもない。一見すると、何かの巨大倉庫のようにしか見えない。そこは、^{ストレージ}倉庫には違いなかったが

……。

殺風景な場所だった。三六〇度、見渡す限りの大地。巨大なプランテーションが地平線の遙か彼方まで続く。そして巨大な倉庫群。小さな街は、景気は悪くない。人口動態にたいして変化はないが、住民の年齢構成は比較的若い。

もちろん若者たちは、皆ここを出たがっているが、貧しいわけではない。むしろ全米の平均収入からすれば、高所得な部類だろう。

スペンサー・キム空軍中佐は、配送車から降ろされた巨大な段ボールを受け取り、受領のサインをタブレット端末に入れた。

まるで死体でも入っていそうなサイズの段ボール箱だった。三人掛かりで降ろす必要があった。

警備主任のジョージ・トリノが、ドライバーとしばらく話し込んだ後、配送車は施設のゲートから、また同じようにして出て行つた。

トラック二台が並列に止められるよう設計された巨大な車寄せの庇ひさしの下で、キム中佐は、「ドライバーは何だつて?」とトリノに尋ねた。

「まず、今日夕方の配送はもうない。飛行機はもう飛んでいないそうだ。民航機もほとんど飛んでいない。地上の配送網は、動いている所は動いているだろうが、ここの輸送はほとんどが空路に頼っているのです、次の配送がいつになるかは全くわからない。ドライバーには、自宅待機の命令が出たそうだ」

「酷いな……。食料は、立て籠もり用の非常食があるから、従業員だけなら、十日や二週間はな

んとかなるだろう。水の心配は要らないし、問題は電気だが、ライフラインを稼働する程度の自家発電は出来る。でも燃料を確認する必要があるな。太陽光発電も合わせると、そんなに心配は要らないか……」

「問題は、従業員家族か。暴動がこんな田舎まで来るとなると、避難する場所なんてないぞ……」

「田舎じゃない。奴らは狙ってくるさ。スカイネット社はここクインシーから始まる、と書いている陰謀論サイトを見たことがある。僕がここに飛ばされた時、前任者から真つ先に警告されたのはそれだったよ。ここは陰謀論者にマークされているから、気を抜くなと。これが最後の便で届いたのは幸運だった」

キム中佐は、カッターナイフを出すと、その段ボール箱のガムテープを切つて開けようとした。「おいおい、ここで組み立てるつもりなのか?」

と施設長のヘンリー・リーバイ博士が玄関から出て来た。物腰穏やかな人物で、システム構築の専門家。普段は、自室に引き籠もって設備の維持と拡張に関する設計図を描いている。

「時間はあまりありませんよ。それに、当分は客人が訪ねてくることもない。視察団もね。上からは何か言ってきましたか？」

「いや、無理は言ってこないよ。全米各地で携帯網が落ち、停電し、トラフィックも極端に低下している。もし停電でシステムが停止するようなら、無理に維持する必要はないだろう。シャツトダウンの用意をしている。それで、電力が戻った時に、慌てずに済む。ところで警備主任、ヴィレツジ内での連絡は大丈夫かね？」

「問題ありません。各サイトの警備班同士で、ウォークキーのチャンネルを合わせるよう事前協議が来ています」

「それって、暗号化されているわけではないよね？」

「それは仕方ないですね。暴徒に聞かれる可能性はありますから、簡単な符牒は、前もって決めてあります。そんなに心配なら、州軍の派遣を要請してはいかがですか？」

「本社経由でやっているはずだけどねえ。あちこち炎上している状況で、平和な街に事前配備してくれとは言えないよね。じゃあ、後を頼む。私はスピーチの用意をしなきゃならない」

施設長が屋内に引き返すと、駐車場に古ぼけたピックアップ・トラックが入ってくるのが見えた。車を降りてきた二人の若者が、ゲートに向かってくる。トリーノは、ウォークキーを出して、二人にテンポラリーバッジを渡して通すよう詰め所の警備員に命じた。

二人の男女が一〇〇メートルほどを歩いてくる。

「あれは、娘さんだっけ？」とキム中佐はトリリーノに聞いた。

「いや、息子の幼なじみで高校の同級生だ。母親が肺癌でね。父親も早くに亡くして、ちょっと大変な時期だ……。父親とは古い付き合いで結婚式にも出た。一〇年前、工事現場の事故で……」

二人のそばまで来た息子のタッカー・トリリーノが、かたわらのベツキー・スワンソンを中佐に紹介した。

「ベツキー、お母さんの具合はどうだい？」と父親が尋ねた。

「それが、三日前病院を追い出されたんです。たぶん暴動が起こるだろうから、都会の大病院は戦場になる。自宅に戻った方が良いから」と

「そうだったのか。なんで教えてくれなかったんだ？ 車を出したのに」

「タッカーもそう言ってくれたんですけど、伯父

が仕事を休んで連れ帰ってくれました。すみません、心配掛けて」

タッカーは、半分ほど開いた段ボール箱を覗き込んで、「スゲーやー——」と声を上げた。

「これ、HAYABUSAじゃないですか！」「どこ製のの？ ベトナムとか？」

とキム中佐が尋ねた。

「空軍の将校なのに、知らないんですか？」

「何度も言うけどさ、僕はパイロットじゃないんで……」

「ハヤブサは日本語で、ファルコンのことを言います。メーカーは、本当は、ファルコン」と命名したかったらしいけれど、それはいろんな商品の登録商標として使われている。そこで、日本人から提案があったハヤブサにしたんです。メイドインUSAのドローンです。でも、バッテリーは日本製、プロペラ回りのモーター、舵を動かすモーター

ターも日本製です。とにかく静かで高効率。EO
センサー周りもたぶん日本製のはずだけど、制御
系だけが、アメリカ製かな……」

「そんなに良い性能なの？」

「中佐は本当に知らないんですね。メーカーが、
これを市場に出そうとしたら、国土安全保障省か
ら横やりが入ったんです。スキャン・イーグル並
の性能を持つドローンを、スキャン・イーグルの
一〇分の一以下の値段で売るなど。あまりに高性
能過ぎるから、法執行機関のみに売れと。これは、
HAYABUSA・Gとあるから、法執行機関向
けですね。ガバメントのGが付いている」

「一般向けとはどこが性能が違うの？」

「メーカーさんは、もともとこれを、電磁耐性が
強いドローンとして売り出したんです。いろい
ろ工夫をして。市場向けには、その辺りの性能を
抜いたという話です。妨害装置に強いドローンは

まずかろうということで。あくまでも噂ですけど
ね」

「それで、これを直ちに運用可能にして、できれ
ば二四時間飛ばせるようにしたい」

「一晩くらい貰えますか？ 組み立てと、マニユ
アルも読み込む必要がある。あと操縦とデータの
送受信は、低軌道衛星を使っているはずですけど、
SIMカードとか入っています？」

「問題ない。メーカーはこれをサブスク・ビジネ
スにしたいらしくて、すでに契約済みのSIMカ
ードが入っているはずだ。地上の携帯各社と、衛
星会社も複数。滑走路は要らないんだよね？」

「はい。これはオスプレイと同じチルト・ロータ
ー方式です。後ろに一つ、前に双発のプロペラが
あって、垂直に離着陸し、飛行時はそのチルト・
ローターを九〇度前方に倒しながら水平飛行に入
る。と同時に、この機体は、折りたたまれていた

主翼を展開し、グライダーみたいなウイングスパンを確保することで、滞空時間を延ばします。上昇気流が得られるなら、それこそモーターを止めて気流に乗り、何時間でも飛び続ける」

キム中佐は、ふう……、とため息を漏らした。

「ご近所さんにドローンの専門家がいて助かった」

「でもこのクラスになると、別にパイロットとか要りませんよ。オマケとして操縦用のジョイ・スティックも入っているはずですけど、基本はタブレットの画面で、中継点や高度を入力するだけで済みますから。それに、施設やヴィレッジの周囲を見張るだけなら、ちよつと大げさですよね？」

「できれば、街全体も監視したい。せめて半径五〇キロ圏内はね。ヴィレッジの周辺だけなら、クアド・コプターがあるよ。タッカーが喜びそうな奴が」

「グチエイサー」の仲間を呼んで良いですか？
組み立てはともかく、マニュアルは分担して読み込んだ方が早い」

「構わない。仲間を呼んでくれ。州内ハイスクル・ドローン大会常勝クラブの腕を見せて貰うよ」

「あのう、これ、バイト代出ますよね？」

とベッキーが聞いた。

「ああ。済まない。もちろん出るよ。軍から出しても良いが、会社の方が報酬をはずめるだろうから、後で博士に相談する。軍からは、感謝状くらい出させよう。大学の願書を書く時に役立てるようなものを」

「ごめんなさい。うちちよつと金欠なので……」

「ベッキーは、大学は諦めて働くと言っているんだ」

「そりゃよくないぞ、ベッキー。君は、うちの息子なんかより遥かに成績が良いのに。難しい問題

「ただ、結論を急いじゃいかん。この暴動が落ちて着いたら、ゆっくり考えよう」

「わかった。バイト代はなるべく日払いで出るようにするから」と中佐が慌ててフォローした。

「彼女、飛行プログラムとか自分で書くんですよ。空軍とか入ったら、大学に行かせてもらえないですかね？」 中佐

「そういう援助ももちろんあるよ、いろいろと。われわれで何か援助が出来るかもしれない」

「タッカーは、スマホを手に取り、旗が立っていることを確認した。」

「全米の七割で携帯がダウンしているのって本当なんですか？」

「だいたいそうだと思うよ。シアトルも電話が繋がりにくくなっている。ワシントンDCなんて、お役所と電話を繋ぐのもひと苦労だよ。都市は燃えているが、郡部の孤立化も始まっている」

息子は、クラブ活動の仲間を一斉呼び出して、ヴィレッジに駆けつけるよう命じた。

「タッカーが部長を務めるドローンクラブ、チェイサー（追跡者）は、ちよつとした有名クラブだった。ワシントン州内で開かれるハイスカールの競技会では毎年のように優勝し、隣接する街のイベントで撮影やデモ・フライトがあれば、バイトとして駆けつける。」

「IT会社のイベントがシアトルで開かれた時には、群制御によるドローン・ショーの演出を担当し、泊まりの宿泊費まで支給された。」

「購入する機体や整備費用の全てを、それらバイト代で賄えるほどだった。」

「タッカーとベッキーが庇の下で、分解されたドローンを段ボール箱から出していると、施設長の放送がスピーカーから流れてきた。」

「……みんな、そのまま聞いてくれ。私は、サ

イト1Aの施設長ヘンリー・リーバイ博士だ。今はたまたまヴィレッジの統括責任者も務めている。よつてこの放送は、ヴィレッジを構成する各サイトににも流れている。

すでに知つての通り、アメリカは混乱の中であり、内戦の瀬戸際にある。暴動が各地で発生し、ここからほんの百キロのヤキマでも、昨日から軍と暴徒らによる激しい銃撃戦が繰り広げられたという話だ。詳細はわからない。われわれは、ここが平和であり続けることを祈っているが、知つての通り各サイトの警備班は、ピストル程度でしか武装していない。暴徒は軍隊レベルの武器で武装しているとのことで、もし襲撃を受けた場合は、抵抗はほぼ不可能だ。われわれは、その兆候をいち早く掴むために、最善を尽くしている。

これから起ることに對しては、各サイトに用意されている「石器時代マニユアル」に従つて

行動するように。ここでわれわれが守っているものは、アメリカの全てであり、人類の知の全てだ。だが、それはここだけにあるわけではない。いざという時は、速やかに避難して、自分たちの生命を守つてくれ。ヴィレッジには、現在二〇ヶ国からの技術者が派遣されており、様々な宗教宗派の人々が共に働いている。それぞれが信ずる宗教において、この平和が保たれるように祈つてほしい。私からは以上だ——」

放送が終わると、ベッキーが「石器時代マニユアルつて何よ？」とタツカーに聞いた。

「それはさ、つまりアメリカが石器時代に戻った時に、このリソースをどうやって守り抜くかを指示するマニユアルのことだよな」

「どうしてそんなものが必要なの？ だって、石器時代に戻るといふことは、電気はもとより、半導体も生産できない時代といふことでしよう？

そんな時代に、ここにあるデジタル・データを守ってほしい何の意味があるのかしら？ 独立宣言書ならともかく」

「意味はあると思うよ。いつか宇宙人が地球を通りかかった時、このヴィレッジに気付いて、地球人類がどんな文明を築いて、どんな理由で破滅したのか学べるかも知れない。火星人や金星人が過去に存在していたら、それがどんな文明で、どんな理由で滅んだか知りたいだろう？」

「そうかしら。私たち、こんなに派手に地球環境を破壊して、こんなに下らない理由で国を壊そうとしているのに。他の文明に遺して伝える価値があるとは思えないわ」

先の大統領選に関する各州の大陪審票決は、大方の予想を覆し、民主党優勢の結果となった。しかしことはそこで終わらず、自動的に合衆国最高

裁へ持ち込まれることになった。最高裁は、共和党系判事が多数派なので、現職の民主党大統領の敗北は避けられなかった。

大陪審票決が開始した頃から、全米で大規模なデモと衝突が繰り広げられていた。ワシントンD Cでは、モールで民主共和両派が衝突し、警察は催涙ガスを撃ち尽くした。

国防総省始め、各政府機関の職員は首都からの脱出を余儀なくされ、ホワイトハウスも群衆に包囲された。今、ホワイトハウスを守っているのは、英国から派遣された海兵隊兵士だった。

ニューヨーク・マンハッタン島は、略奪の戦場と化し、都市機能は完全に麻痺し、島から出る全ての橋とトンネルが燃えるか封鎖状態だった。

そして西海岸の主要都市を含め、ほぼ全ての大都市が停電していた。意図的な送電網破壊による停電だった。

全米各地、カナダ国境地帯では、放火による山火事が多発し、中西部では、竜巻被害が拡大していたが、この混乱で、被害の全容も掴めずじまい。共和民主の対立は軍内部にも深刻な影響を及ぼし、軍隊の出動にも支障を来^{きた}しており、全米の各地で、たまたま演習中だったNATO各国軍の部隊まで治安維持活動に駆り出されていた。自衛隊とて例外ではなかった。

第一章 さまよえるヲランダ人

エネルギー省が保有する終末の日の指揮機^{ドゥームズデイ・プレイン}、イカロス^イ、ボーイング767旅客機は、大西洋沿岸部を離れてワイオミング州上空を飛んでいた。

ともにエネルギー省高級幹部を乗せてワシントンDCを飛び立った国家核安全保障局^{N S A}のDC・9型機が謎の墜落事故を起こしたせいで、イカロスは、なるべく内陸部を飛んでいた。

第一報は撃墜されたという情報だったが、真偽は定かではなかった。情報は混乱を極めていた。

そのDC・9には、エネルギー省に七名しかいない最高核権限者、Qクリアランスを持つ一人が乗っていたはずだが、その一人の消息ももちろん

不明だった。

そしてこのボーイング767型機にも、もう一人Qクリアランスを持つ人物が乗っていた。ミライ・アヤセは、滅多に本名を名乗らないし、本名で呼ばれることも極端に嫌う。エネルギー省内では、暗号名の魔術師^{ソイサラー}「ヴァイオレット」で通し、近い同僚にだけ、M・Aと呼ぶことを許す。そして彼女がいけない場所では、あの六〇〇万ドルの義手を持つ女^シと囁かれてもいた。

実際には、エネルギー省が開発予算を提供している彼女の左腕の義手は、六〇〇万ドルより遥かに高かったが。

767型機のコクピット後ろに造られた静音ルームは、せいぜいニューヨークの地下鉄車内程度の騒音しかしない。数メートル離れた者同士が、がなり立てずに会話することが出来た。

前日から飛び続けている機体は、途中ヤキマに着陸し、自衛隊から食料の提供を受けた。搭乗するクルーや職員たちにとっては、それが一日、あるいは二日ぶりのまともな食事になった。せいぜい、冷たいピザの差し入れを覚悟していたのに、レトルトを含め、まともな食事が提供されたのは驚きだった。戦闘糧食ではなかった。

車椅子に座り、会議用テーブルで寿司を摘まむヴァイオレットは、左手の義手でメモを取りながらの食事だった。

彼女の秘書役のレベッカ・カーソン海軍少佐がマグカップを持って入ってきた。

「みんなの様子はどうか？」

「ええ。お陰様で、皆まともな食事にありつけてほっとしています。私は、白身魚のソテーと、ライスカレーを食べました。懐かしかったですね。アツギ時代を思い出しました。ヴァイオレットはさすがハシの使い方が身についている」

「止してよ。あの仕事人間の父親が、私に箸の使い方なんて教えてくれたと思う？ 昔の義手は、フオークすら持てなかった。だから私は、右手一つで何でも食べられるお箸で食事するようになった。アメリカ社会で箸文化が広がらないのは不思議だわ。それで？」

「はい。DC-9の撃墜ですが、近くを飛んでいたビジネス・ジェット機のパイロットの目撃談が大元ようです。ミサイルの航跡を発見し、遠くで何かが爆発するのを見た。海軍出身のパイロットだそうです」

「墜落現場とか確認したの？」

「国家偵察局が、衛星で残骸を確認しました。残念ながら、現場付近にドローンや戦闘機を飛ばす余裕は軍にはないそうです」

「地上から肩撃ち式ミサイルで狙って届く高度ではない。となると、敵の戦闘機か、味方の戦闘機によって撃墜されたということよね？」

「事実上の飛行禁止命令が出ているので、友軍機による攻撃の可能性はありません。残念ですが、敵の、恐らくはステルス戦闘機でしょう」

「中国海軍の空母？ なぜ非武装のエネルギー省の機体が狙われたの？」

「Qクリアランスを持つソーサラーの暗殺を狙った可能性があります」

「意味ないわ。まだ六人もいるし、私を除いた五人は、まだ首都周辺でしょう。全員は殺せない」

「そうですね。引き続き調べます」

「ところで、この機内から『ミダス』を使える？」

「国家安全保障局の『ミダス』でしたら、衛星経由で回線は繋がられるはずです。ヴァイオレットには、『ミダス』を使う権限があります。ただ、動いているでしょうか？ あちこち回線も切断され、電力も落ちていきますから」

「試してみるしかないわね。例のロシア人グループ、傭兵会社『ヴォストーク』のコマンドが持っていたメモに気になるワードがあったのよ。どうも引つかかる。英語で『砦』^{フォート}というワードが何回か出ていた。彼らが活動していたワシントン州周辺で、砦に該当するような場所があるかどうか知りたいの」

「あの辺りで砦となると、先住民の砦とかでしょうか？ 回線を繋がられるかどうか、バスケス中佐に聞いてきます」

カーソン少佐は、マグカップを置いたまま静音ルームを出ていった。ドアを開けた途端、ゴー！

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。